

(第30回) 音楽鑑賞会**紀尾井ホール室内管弦楽団第115回定期演奏会**

今季最強寒波、都内で最高気温がなんと2度！という土曜日の午後、紀尾井ホールでのアイアン・クラブ第30回音楽鑑賞会に参加した。会員とご家族のご参加は、前日と合わせて20名であった。帰路は、警告されていたような積雪には至らなかったものの、粉雪が降りつける中、四ツ谷駅がとても遠く感じられた。

震えあがるような寒さのためか、ご来場を見合された方も、少なからずおられたかもしれず、いつもより空席が目立つ感じがした。



「こんな寒さの中を来場してくださったお客様に満足して頂こう」という、指揮者ホーネック、コンサートマスターバラホフスキーを中心としての紀尾井室内管弦楽団員の思いが、ひしひしと伝わってくる、「紀尾井ホール室内管弦楽団第115回定期演奏会」の2時間を、たっぷり楽しむことができた。

プログラムは、「ミュトスとロゴスⅡ アポロンに寄せて」というテーマによるものであり、ホーネックが想いを込めた音楽の世界を展開するシリーズの、「その2」であった。

昨年2月に、「ミュトスとロゴスそのⅠ」が演奏され、それに続くものということであったが、まったく趣を異にするものと感じられた。

主題の「ミュトスとロゴス」とは、古代ギリシャに源を発する概念で、ミュトスは、物語、神話、寓話、お話などと理解してよいようで、一方、ロゴスは、理性、論理、などと解してよいようである。キリスト教世界では、聖書を指し示すとされる。

今回プログラムで、音楽評論家山崎浩太郎氏は「ギリシャ神話の詩と音楽の神アポロンが主人公であり、神話と聖書にちなむ作品を中心とする選曲」と解説されている。

全体像は、ギリシャ神話の世界から、キリスト教の聖書の世界へ、そして再びギリシャ神話の世界へという流れであり、目に見えないもの、言葉に表しきれないものを、バロックから近代まで、時代を追い、空間を超えて音楽でつづって見たということかと感じられた。

指揮者、ライナー・ホーネックは著名なヴァイオリン奏者であり、1992年からウィーン・フィルのコンサート・マスターであり、室内楽においてもリーダーとして多彩な活動をしている。2017年4月より、紀尾井ホール室内管弦楽団の首席指揮者である。

以下、プログラムのご紹介（多くは山崎氏の解説から引用させていただいた）と、簡単な感想である。

プログラム**クーラン パルナッソス山もしくはコレリ讃**

クーラン(1668~1733)はフランスの音楽一家の中でもっとも大をなした作曲家であり、大きな影響を受けたイタリアの音楽家、コレリをたたえ、その作曲技法を模して、コレリがパルナッソス山(ギリシャ神話で芸術の殿堂とされる)に上り、音楽に浸る中で、詩と音楽の神アポロの近くに至る情景を7つの楽章で、描写的に描いている。

古典的な弦のアンサンブルが、快かった。

バッハ ヴァイオリン協奏曲第1番イ BWV1041

ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685~1750)が、ヴァイオリンを得意としたコレリ、その流れをくむヴィヴァルディなどのイタリア音楽の研究から影響を受け、30代のころ作曲されたということである。

ホーネックが、ソリストとしてヴァイオリンを演奏しながら指揮し、演奏した。

ここまでの2曲は、チェンバロが、通奏低音の役割を果たした。

以降は弦楽器のみのアンサンブルであった。

ヴォーン・ウィリアムズ トマス・タリスの主題による幻想曲

レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ(1872～1958)は、イギリス クロスター州の出身で、交響曲、協奏曲、歌曲など多くの作品を残している。

この曲は、代表作の一つで、1910年に作曲・初演された。

主題は、トマス・タリス(1505年ごろ～1585)の曲から取られている。

弦楽合奏を3つの群に分割してそれぞれに役割をもたせ、オルガンの響きを模したものとのこと。あまり聴いたことのないような、不思議な感じを受けた。

武満 徹 弦楽のためのレクイエム

20世紀の日本を代表する作曲家、武満徹(1930～1996)が、1957年に作曲し、初演された、弦楽合奏のための曲である。

レクイエム…通常鎮魂曲と訳されるが、「安息を…」という意味である。武満が大きな影響を受けた早坂文雄(当時、死の病であった結核で1955年に亡くなっている。)にささげられたもので、武満自身も結核で苦しみ、死を覚悟するような状況だったそうである。

発表当初はかならずしも注目を浴びるようなことではなかったが、1959年に来日したストラヴィンスキーが激賞したことから一挙に評価が高まり、武満の大作曲家としてのスタートとなった。幸い、武満は結核治療の進歩により死の危機から救われ、その後、多くの名曲を残している。

ヴェルディのレクイエムなどの壮大な曲とは、まったく曲想、楽曲の形式は異なるものと思うが、作曲当時に武満が置かれていた境遇・背景を思いながら聴くと、弦のアンサンブルの中から、人間のはかなさのようなものが深く感じられた。

この日のプログラムの構成も影響しているのかもしれないと思いつつ……。

ストラヴィンスキー ミューズを率いるアポロ

イーゴリ・ストラヴィンスキー(1882～1971)はロシアに生まれ、第2次世界大戦の前までヨーロッパで活動し、戦火を避け、後半生をアメリカで送っている。

この曲は、1928年にアメリカでの現代音楽祭で初演されたバレエ音楽で、新古典主義の作風である。有名な3大バレエ音楽「火の鳥」「ペトルーシュカ」「春の祭典」の印象と全く異なるもので、アポロンが、3人のミューズと踊り、パルナッソス山に登る様子を軽やかに描いている。

よく知られているストラヴィンスキーの音楽とは全く異なるものと感じながら、面白く聴くことができた。

今回も改めて感じたが、このような演奏会を企画される『紀尾井室内管弦楽団』が、次にどのような音楽の世界に導いてくれるのか、期待したい。

今回も、アイアン・クラブ音楽鑑賞会として、何かと新日鉄住金文化財団よりご厚意を頂いたことをご報告する。

(白神賢志・記)

